9	0	0	1	0	1	0	24	1	0	1	1	1	1
10	0	0	1	0	1	1	25	1	1	0	0	1	0
11	0	0	1	1	0	0	26	1	1	0	0	1	1
12	0	0	1	1	0	1	27	1	1	0	1	0	0
13	0	0	1	1	1	0	28	1	1	0	1	0	1
14	0	0	1	1	1	1	29	1	1	0	1	1	0
15	1	0	0	1	0	0	30	1	1	0	1	1	1
時刻信号	0	1	0	0	0	0	ＴＣＤ	1	0	0	0	0	0

3　スクランブル制御（ＳＣＣ）は、別表第七号（スクランブル制御の構成）のとおりとする。

4　連続性指標（ＣＩ）は、１つの論理チャネルにおけるパケットデータの連続性を示すための番号であり、ｂ９を最下位ビット、ｂ12を最上位ビットとする４ビットの２進値で「０」～「15」を順次繰り返す。データグループの先頭で前のパケットデータのＣＩの値にかかわらず「０」とすることができる。

5　データグループ制御（ＤＴＣ）は、データグループ先頭フラグ（ＴＤＦ）及びデータグループ終端フラグ（ＥＤＦ）の各１ビットから成り、パケットプリフィックスのｂ13をＴＤＦ、ｂ14をＥＤＦとする。

⑴　ＴＤＦは、データグループの先頭のパケットデータを示すものであり、先頭のパケットデータのときに“１”とし、その他のパケットデータのときに“０”とする。

⑵　ＥＤＦは、データグループの終端のパケットデータを示すものであり、終端のパケットデータのときに“１”とし、その他のパケットデータのときに“０”とする。

6　運用信号を送出する場合は、ＬＣＩ２は、配列順に“111100”、ＳＣＣは、“01”とする。

7　データブロックの176ビットは、配列順にｂ１～ｂ176とする。８ビットを単位として情報データを表す場合、データブロックの22バイトは、ＤＢ１～ＤＢ22とする。パケットデータにおける配列はＤＢ１のｂ１～ｂ８、ＤＢ２のｂ１～ｂ８、…、ＤＢ22のｂ１～ｂ８の順とする。

8　冗長ビットは、次のとおりとする。

⑴　モードコントロール部の誤り訂正に用いる符号は、(16，５）ＢＣＨ符号とする。16ビットの符号を先頭から配列順にｂ１～ｂ16とし、情報ビットは、ｂ１からｂ５までの５ビット、チェック符号ビットはｂ６からｂ16までの11ビットとする。

ｂ１からｂ５までの情報ビットの値を順次、多項式$a_1X^{14}+a_2X^{13}+\cdots+a_5X^{10}$の上位桁から各項の係数とし、この多項式を生成多項式Ｇ（Ｘ）で除した剰余の多項式$a_6X^9+a_7X^8+\cdots+a_{15}X^0$の各項の係数値をチェック符号ビットとし、順次ｂ６からｂ15までの値とする。

さらに、ｂ16はｂ１～ｂ16が偶数パリティとなるように定める。

生成多項式Ｇ（Ｘ）は次式とする。

$G(X)=X^{10}+X^8+X^5+X^4+X^2+X+1$

⑵　データパケット部の誤り訂正に用いる符号は、多数決論理回路による複合が可能な（272，190）短縮化差集合巡回符号とする。

データパケット部の272ビットを、パケットプリフィックスｂ１～ｂ14の14ビット、データブロックｂ15～ｂ190の176ビット及びチェック符号ｂ191～ｂ272の82ビットとする。

ｂ１からｂ190までの情報ビットの値を順次、多項式$b_1X^{271}+b_2X^{270}+\cdots\cdots+b_{190}X^{82}$の上位桁からの各項の係数値とし、この多項式を生成多項式Ｇ（Ｘ）$=X^{82}+X^{77}+X^{76}+X^{71}+X^{67}+X^{66}+X^{56}+X^{52}+X^{48}+X^{40}+X^{36}+X^{34}+X^{24}+X^{22}+X^{18}+X^{10}+X^4+1$で除した剰余の多項式$r_{81}X^{81}+r_{80}X^{80}+\cdots\cdots+r_0X^0$の各項の係数値を冗長ビットとして、上位桁から順次ｂ191からｂ272までの値とする。

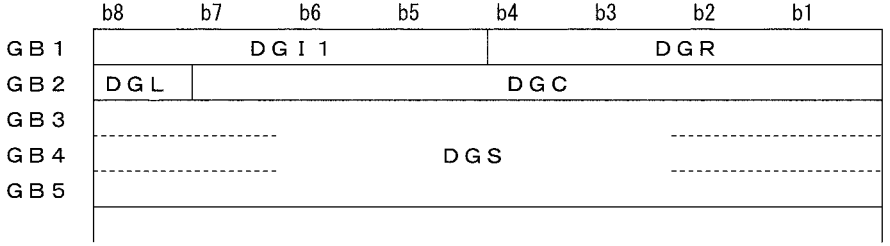
別図第四号　ＤＧ構成１及びＤＧ構成２の構成

１　ＤＧ構成１

データグループヘッダ ＤＧＨ	データグループデータ ＤＧＤ	冗長ビット ＣＲＣ

注１　データグループは、８ビットを単位として先頭からＧＢ１、ＧＢ２、ＧＢ３…で表す。各ＧＢのｂ１～ｂ８はＤＢのｂ１～ｂ８に各々対応する。

２　データグループヘッダ（ＤＧＨ）は、データグループ識別１（ＤＧＩ１）、データグループ連送（ＤＧＲ）、データグループリンク（ＤＧＬ）、データグループ連続番号（ＤＧＣ）及びデータグループサイズ（ＤＧＳ）から成り、データブロックの先頭のＧＢ１～ＧＢ５の５バイトとする。データグループヘッダの構成を以下に示す。



⑴　ＤＧＩ１は、ＧＢ１のｂ８～ｂ５の４ビットから成り、データグループの種別を２進値で示す。

⑵　ＤＧＲは、ＧＢ１のｂ４～ｂ１の４ビットから成り、同一内容のデータグループを連続して送出する（連送）場合に連送するごとに１を加算して連送回数を２進値で示す。

連送を行わない場合を「０」とし、連送する場合の初期値を「１」とする。

⑶　ＤＧＬは、ＧＢ２のｂ８の１ビットから成り、同一の論理チャネルの同一のＤＧＩ１において続いて送出する内容の異なるデータグループとの連結の状態を示す。次のデータグループと連結がある場合を「１」、連結がない場合を「０」とする。

⑷　ＤＧＣは、ＧＢ２のｂ７～ｂ１の７ビットから成り、連結する内容の異なるデータグループの順序を示す連続番号とする。

データグループが１つの場合を含み最初のデータグループのＤＧＣを「０」とし、最大値を「127」とする。

⑸　ＤＧＳは、ＧＢ３、ＧＢ４及びＧＢ５の24ビットから成り、データグループデータのバイト数を「１」～「16777215」の範囲内で２進値により示す。

３　データグループデータ（ＤＧＤ）は、データグループとして伝送される情報の符号化されたデータであり、ＤＧＤの先頭から８ビット（１バイト）を単位として配列順にＤＤ１、ＤＤ２、ＤＤ３…とする。各ＤＤのｂ１～ｂ８はＧＢのｂ１～ｂ８に各々対応する。

４　冗長ビット（ＣＲＣ）は、16ビットのサイクリック・リダンダンシー・チェック符号とし、その生成多項式は次式とする。

$G(X)=X^{16}+X^{12}+X^5+1$

誤り検出符号は、データグループのデータを生成多項式で除した剰余の多項式に基づく16ビットのＣＲＣ符号とする。符号化区間はデータグループヘッダの先頭からデータグループデータの終端までとする。

ＣＲＣ符号の生成は、誤り検出の符号化区間の情報ビット数を（ｎ－16）とする場合、情報ビットの値を$C_{n-1}X^{n-1}+C_{n-2}X^{n-2}+\cdots+C_{16}X^{16}$の各項の係数値とし、これを生成多項式$G(X)=X^{16}+X^{12}+X^5+1$で除した剰余の多項式である$s_{15}X^{15}+s_{14}X^{14}+\cdots+s_0X^0$の各項の係数値をＣＲＣ符号とし、上位桁から順にデータグループデータに続いて順次配列する。

５　データグループの伝送においては、同一の論理チャネルにおいて、１つのデータグループに属するパケットデータは連続して伝送し、他のパケットデータの割込み伝送は行わないこととする。